

## ウェブコラム④ IS-LM分析とクラウドイング・アウト

クラウドイング・アウトについて考えるとき、広く用いられるのが IS-LM 分析である。IS-LM 分析はイギリスの経済学者ヒックスがケインズ理論を視覚化するために考案し、その簡明さから急速に普及した。一昔前まではマクロ経済学といえば IS-LM 分析のことであったが、現在は研究レベルでそのまま用いられることはない。現代のマクロ経済学の視点から見ると、IS-LM 分析にいくつかの重大な問題点が存在することは間違いないが、経済政策の効果を鳥瞰<sup>ちようかん</sup>するのに便利なことも事実である。そこで、以下では IS-LM 分析によってクラウドイング・アウトを確認してみよう。

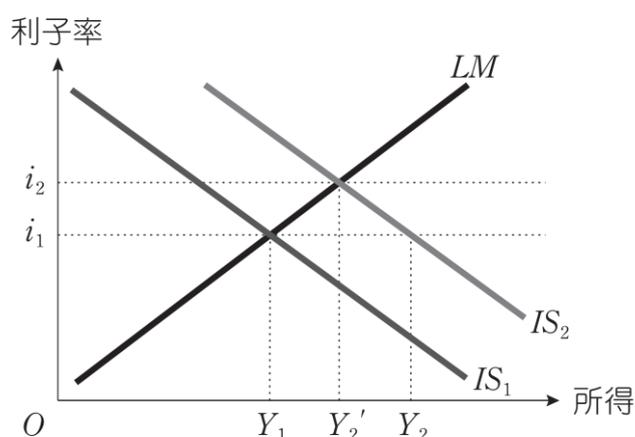
IS-LM 分析の枠組みは、利子率と所得の関係を軸に、財市場と貨幣市場の均衡を考えたものとして理解することができる。財市場の均衡条件は総供給と総需要が一致する  $Y = C + I + G$  と表されるが、右辺のうち民間投資  $I$  は利子率に影響を受けると考えられる。利子率が上昇すると資金調達が困難になり、民間投資は減るのである。したがって、財市場においては利子率と所得は右下がりの関係で表され、これが IS 曲線と呼ばれる。

一方、貨幣市場の均衡条件は貨幣供給と貨幣需要が一致することである。貨幣需要は 2 つの要素から構成される。まず所得が増えると、より多くの貨幣が必要とされるようになるので貨幣需要は増える。これを取引需要という。また、利子率が上昇すると債券保有が有利になるので、(不利になった) 貨幣需要は減少する。これを資産需要という。貨幣供給が政策的に決まってい固定されているとすると、固定された貨幣供給に貨幣需要が一致するように利子率と所得の関係が決まるはずである。いま利子率が上がると貨幣需要が減少してしまうので、貨幣供給と一致するところまで貨幣需要が戻るためには所得が増加する必要がある。つまり、貨幣市場においては利子率と所得は右上がりの関係で表され、これを LM 曲線と呼ぶ。

図 A には所得を横軸、利子率を縦軸として、右下がりの IS 曲線と右上がりの LM 曲線が描かれている。当初の IS 曲線は  $IS_1$  であり、均衡利子率は  $i_1$ 、均衡所得は  $Y_1$  である。いま財政支出を拡大すると、財市場で総需要が増加するので IS 曲線が  $IS_1$  から  $IS_2$  のように右上方へシフトする。このとき、利子率

が不変で $i_1$ のままであれば所得は $Y_2$ まで増加するが、貨幣市場の均衡を考慮すると利率が $i_2$ へ変化するので、所得は $Y_2$ まで増加するにすぎない。利率が上昇したため民間投資が減少し、その分だけ所得の増加が相殺されてしまったのである。 $Y_2$ と $Y_2'$ の差がIS-LM分析におけるクラウディング・アウトの影響を表している。

図 A 財政政策の効果とクラウディング・アウト



クラウディング・アウトの程度はLM曲線の形状によって影響を受ける。たとえば、利率の変化に対する貨幣需要の反応（資産需要）が非常に小さい場合、LM曲線は垂直に近くなる。これが図Bのケースである。このケースでは財政支出の拡大によって所得は増加しない。利率だけが大きく上昇し、財政支出の拡大を完全に相殺してしまうだけのクラウディング・アウトが生じる。これとは逆に、利率の変化に対する貨幣需要の反応（資産需要）が非常に大きいと、LM曲線は水平に近くなる。これが図Cのケースである。このとき財政支出を拡大すると、利率は変化せずに所得が $Y_1$ から $Y_2$ まで大幅に増加する。このケースではクラウディング・アウトはまったく生じない。

図 B 完全なクラウディング・アウトのケース

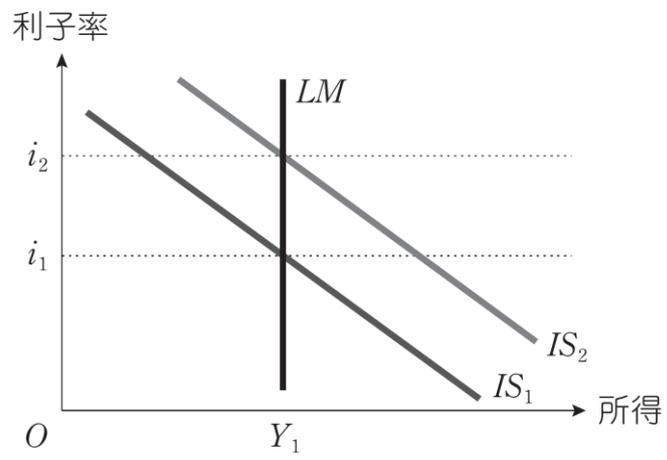


図 C クラウディング・アウトのないケース

